

心の隙間 埋めるよう

アルコール依存症患者らの作品展 山形



アルコール依存症と精神疾患で治療を受けている公徳会若宮病院（山形市）の患者による作品展「若宮展」が市内の遊学館で開かれている。作業療法の一環で取り組んでいる「ロールモザイク画」で、鮮やかな色使いが会場に明るい雰囲気醸し出し、患者の回復に向けた意欲を伝えている。

アルコール依存症や精神疾患の患者が手掛けたロールモザイク画を紹介している若宮展 山形市・遊学館

ロールモザイク画 じっくり制作、生きがいに

ロールモザイク画は2枚×4枚の短冊状に切った模造紙を使って制作する。筒状に巻いて絵の具で染めた紙を「ピース」にし、縦に貼り付けて描いていく。同病院独自の手法だという。

山形の風景と棟方志功の版画をモチーフにした計7点を展示した。縦100枚、横180枚という畳1枚ほどの大作が中心で、1点に約2万個



ロールモザイク画に使う「ピース」。筒状に巻いた小さな紙を貼り付けて制作している

「TANADA」は昨年夏、障害者の作品も対象にしたポコラート全国公募展（東京都）で入選し、都内で約1カ月間展示された。作業療法室長の田中忍さん（46）は「外の目に触れ、評価されることで制作のモチベーションが高まった」と振り返る。美術や音楽を通じた「表現療法」を掲げていた若宮病院は2001年までに計5回の若宮展を開催した。患者の意欲がスタッフを刺激し、16年ぶりの開催につながった。

一つ完成させるまで少なくとも10カ月を要するため、退院してからも通って打ち込む人がいるという。患者の多くは60代で、アルコールに依存していた人が新たな生きがいを見いだしている。田中さんは「作品に込められた力を感じてほしい」と話す。26日まで。